



## 平穏な1日

---

2098年、僕は君と出会った。  
僕はまだ大学生。  
だけど、大人みたいに働いていた。

その日は、いつもより6時間も早く仕事が終わった。  
会社を出たのは15時。  
これからでも、大学には十分間に合う。  
けど、単位とかが関係ない僕は行きはしなかった。  
大好きなブラックコーヒーを飲むために、行きつけのカフェへと足を運ぶ。  
もう、マスターとも語りあう仲だ。

「マスター」

「ああ、Bくん。こんにちは」

Bとは、僕の名前だ。

マスターは、ガンで亡くなった父親の仕事を継いだらしい。

僕としては、素晴らしいと思う。

僕の実家は、福岡にあり小さな八百屋をやっている。

でも、僕は福岡だなんて田舎は嫌だから、この東京に出てきた。

自分で言うのもアレだけど、僕は頭がいい。

コンピューター関係をやるのが得意だから、そこいらのショボイ大学でもいいと思っていたが、  
気づいたら東大に入っていた。

けど、正直東大の中には入りたいと思う学科はなかった。

だから、鉛筆を振って決めた。

まあ、しばらくすると当然のごとく、そんな所には行きたくなくなる。

だから、僕はさっさと就職してやった。

「マスター、コーヒー1つください」

「もうできてるよ」

「流石マスター」

僕は、正直そこいらの人間と慣れ合うのは好きではない。

むしろ、嫌いだ。

だけど、マスターは話すほどの価値がある人間だと思う。

だから、正直僕自身も彼と話している自分に驚いている。

僕より年上のマスターは、僕よりもたくさんを知っている。

マスターの話は、実に面白い。

下らないことなのに、マスターが話すと一味違う話になる。

そんな話を聞いていると、この地球に生まれたこともそう悪いことではないと思える。

「そういえばマスター、新しいメニューを追加すると小耳に挟んだのですが...」

「ははは、バレていたか。実はね...いや、できてからの楽しみにしようか」

「マスターは、現金ですね」

「できたら、連絡するよ。味見係になってくれ」

「わかりました」

マスターは、仕事関係を除くと少なくなる連絡相手の一人だ。  
といっても、あまりメールや電話をしたりするわけではないが。  
携帯の発着履歴を見たとき、一番多く表示されているのは母だろう。  
嫌ではないが、正直自分でも微弱のむなしさを感じる。